

機関番号：3 2 6 3 0

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：1 9 3 2 0 0 3 7

研究課題名（和文） 真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—

研究課題名（英文） The Interdisciplinary Research into the Classical Texts
preserved in the Temples of Shingon Esoteric Buddhism
Centering on the Texts bequeathed to the Kong ji Temple

研究代表者

後藤 昭雄（GOTO AKIO）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：8 0 0 2 2 2 8 4

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、大阪府河内長野市にある真言宗寺院金剛寺所蔵の聖教の全体的調査である。そのために聖教全部の略目録の作成と貴重典籍についての詳細な調査研究を二つの柱として作業を行った。その結果として、なお整理調査が行われていなかった第 21 函から第 55 函までの聖教について略目録の作成を行い、報告書に公表した。これによって、金剛寺所蔵聖教のおおよそについては目録化がなされたことになる。貴重典籍については、刊本および音楽資料については全体的調査を行い、そのうちの重要資料は学術的位置づけを行った。精査を行った典籍の主なものは『全経大意』『百願修持観』『明句肝要』『清水寺縁起』『無名仏教摘句集』などである。これらについては論文と併せて影印あるいは翻刻によって全体の内容を報告書に公表した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of our project is a general investigation into *Kongō-ji Shōgyō* (金剛寺聖教): the collection of the sacred texts in the possession of the Shingon-shū (esoteric Buddhism) temple Kongō-ji in Kawachinagano City, Osaka Prefecture.

The project's aims were two fold. Our first priority was to make a complete, simplified catalog of the *Shōgyō*. Our second priority was detailed research into and scrutiny of selected cardinally important materials of the *Shōgyō*: for example, *Zenkyōtaii* (全経大意), *Hyakuganshūjikan* (百願修持観), *Myōkukanyō* (明句肝要), *Kiyomizudera-engi* (清水寺縁起) and *Mumyōbukkyōtekikushō* (無名仏教摘句抄).

We were able to complete a preliminary catalog of the *Kongō-ji Shōgyō* texts stored in Boxes 21 to 55 (inclusive), comprising texts and documents which had previously not been systematically catalogued or researched. In so doing our research team has succeeded in cataloging nearly all of the *Kongō-ji Shōgyō*.

As part of our project, we conducted comprehensive research into the musical scores and the Buddhist printed books (including fragmented materials) in the *Shōgyō*, and we conducted academic evaluations of the *Shōgyō* collection's important materials.

In conclusion, as a result of this project, we published three volumes of academic report bulletins in our research term of four years. We incorporated our *Shōgyō* catalog in these three volumes, and in addition included research articles on *Kongō-ji Shōgyō*, accompanied by facsimiles of the texts and documents, and *honkoku* (transcriptions) of various significant materials.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2010年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
総計	14,900,000	4,470,000	19,370,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 日本文学

キーワード：金剛寺 寺院資料 聖教

1. 研究開始当初の背景

代表者後藤は20年以上前から個人的に金剛寺所蔵資料の調査を行ってきたが、途中から、分担者の海野、研究協力者の箕浦尚美らの援助を受けながら、一切経の整理調査を継続してきた。これに分担者の梶浦が参加し、調査を進めるなかで貴重な経典の発見があり、これを契機として分担者落合が参加したが、平成12年度以降、落合を研究代表者として、2度に亙り、科学研究費補助金(基盤研究(A))の助成を受け、一切経の調査整理を行った。この一切経の研究と併行して聖教についても基礎的な調査整理を進めてきた。

金剛寺所蔵資料は大きく一切経と聖教に分かれるが、一切経については全体的な調査研究にまで及んだが、聖教については、なお基礎的な調査の途中の段階にあった。

2. 研究の目的

本研究は大阪府河内長野市にある真言宗寺院、天野山金剛寺所蔵の聖教について、全体的な調査研究を行うことを目的とする。具体的には次のような作業を行うことを目的とする。

- (1) 全体的調査
 - ①金剛寺所蔵聖教全部の略目録、いわゆる棒目録の作成
 - ②そのための未整理聖教の整理調査
- (2) 貴重典籍の発掘および精査
- (3) 聖教の識語集成の作成の準備
- (4) 研究成果の公開

3. 研究の方法

本研究の柱は聖教全部の略目録の作成と貴重典籍の精査であるが、いずれも金剛寺における現物に即しての調査研究が不可欠であるので、毎月1度、金剛寺に出張して、調査を行うことを基本とした。これについては代表・分担・連携研究者のほか、研究協力者、調査協力者の援助を得た。多少の出入りはあるが、毎回十数名が作業に従事した。

略目録作成の事項として、以下の項目を設

定して作業を行った。外題、内題、尾題、残存状況、書写年代、手沢、冒頭(書名未詳の文献については冒頭の10字程度を記録する)、備考。

貴重典籍の調査研究 現物に即した緻密な調査と、併せて写真撮影を行った。

識語集成を見据えた調書作成 書写年代の古い聖教(おおよそ天正以前を目途とした)については詳細な調書を作成した。

4. 研究成果

(1) 略目録の作成

平成19、20年度には第21函から第30函までの2680点の聖教について調査を行い、「金剛寺聖教目録稿」として公刊した(下記の研究成果中間報告書)。

21年度には第31函から第46函までの2157点の聖教について調査を行い、公刊した(同上)。

22年度には第47函から第55函までの1233点の聖教の調査を行い、公刊した(下記の研究成果報告書)。

以上により、先に目録化が行われていた第1函から第20函(平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究(A)「金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究」(研究代表者落合俊典)と合わせて、金剛寺聖教の略目録の作成がなされたことになる。

聖教の個別調査研究の主なものとは以下のとおりである。いずれも下記の報告書に成果を公表した。

(2) 天野山金剛寺聖教中の刊本概観

天野山金剛寺には寫本一切経のほか、多くの聖教が所蔵されているが、その大半は寫本であるが、ごく少量の刊本も存在する。過去に行われた数次の調査において、一部の高野版や根來版について、その奥書や傳來などに關する報告がなされているものの、全體像の把握はなされていなかった。今次の調査は所蔵典籍のほぼ全部を対象としたもので、刊本についても、收藏状況やその特色など、その

全體について概観することが可能となった。本稿は、そのうち十六世紀以前の古刊本を対象とするものである。

金剛寺所蔵の刊本は、二點の中國刊本を除き、すべて日本開板典籍である。日本の典籍刊行の歴史は平安時代以前にまでさかのぼることができるが、本格的に行われるようになったのは十二世紀以降のこととされる。金剛寺所蔵の古刊本には、平安時代のものは確認できなかつたが、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代のものが確認できた。また版種が判別できたものに、高野版、根來版、春日版、西大寺版、五山版、淨土教版などがある。時代、版種が多様なだけでなく、印刷年次の下限が明確なものも多く、古刊本研究の重要な資料となるものである。

金剛寺は眞言密教寺院であり、高野版や根來版等が豊富に收藏されていることは當然のことともいえるが、唯識、華嚴、律、淨土、禪などの書もあり、往時の金剛寺が學問寺として聖教の整備をはかってきたことをしめすものと考えられる。ただ、眞言宗関連書が高野版と根來版のみで、東寺、醍醐寺など京都の眞言宗寺院開板典籍が確認できなかつたことも注目される。

また形體的な特色として、高野版『大毗盧遮那成佛經疏』、淨土教版『選擇念佛本願集』、版種不詳『梵網經』など宿紙に印刷されたものが散見されることも注目される。金剛寺一切經中に宿紙が多いことは、すでに指摘されていることであるが、聖教においても宿紙が多用されていることは、金剛寺における典籍整備史上、今後検討しなければならない問題のひとつである。

また僅か二點ではあるが、宋刊『法華經』と元末明初刊『廣韻』という、中國の稀覯の古刊本が確認できたことも調査の成果のひとつである。

(3) 学頭の書写活動から見た金剛寺教学の変遷

金剛寺聖教は約一万点にのぼる資料から構成される。中心となる中世密教聖教は歴代の学頭や多くの学僧の書写活動により形成され、これらの資料からは当時どのような教えを求め伝えようとしていたのかを知ることができる。これら聖教成立の背景には学僧の書写活動は欠かせないが、学僧の中でも「学頭」は寺内での學問を修める最高位にあり、学頭の書写活動からは聖教の時代的特徴を見ることができる。

まず、開山阿観によって始められた伝法会は歴代学頭によりその法灯が継がれた。当初は『最勝王經』や『法華經』を講ずる形式であったが、金剛寺教学の中心には『釈摩訶衍論』の影響を認めることができる。第五代阿鑊によって書き留められた『釈論抄出』は高

野山大伝法院の論義の様子を伝えるものであり、また第九代忍実の『釈摩訶衍論眼精鈔』についても後の金剛寺教学に大きく影響するものであった。両者の影響を受けながら第十三代学頭となる禅恵が盛んな書写活動を展開する。禅恵は当初、『釈論抄出』の書写から始まり『釈論』の解明のために根來寺に赴き頼瑜の『釈論開解鈔』等を書写した。禅恵にとって頼瑜の教学や事相に関する聖教は、金剛寺とは異なった蔵に映ったのであろう。根來寺と金剛寺の関係は金剛寺聖教を考える上で無視することはできず、この頃より根來寺の聖教が金剛寺に伝えられるようになる。禅恵によって書写された一連の頼瑜関係聖教、また第二十二代覚祐が用いた根來版など、根來寺で学んだ禅恵の影響、また根來寺が学山として他山に与えた影響を見ることができる。

金剛寺聖教は院政期・中世・近世の三期に分類できる。密教経軌が中心となる院政期の聖教とは異なり、中世には『釈摩訶衍論』を中心とした伝法会に使用するテキストの書写が中心となる。江戸時代には第三十三代祐弁真乗による論義関係写本が目立つようになり、灌頂や法要に関する資料も多く見られるようになる。時代により書写される聖教も異なるが、阿観によって始められた伝法会の考えは、教理を探求する学僧により衰えることはなく脈々と受け継がれていったことを聖教が語っている。

(4) 金剛寺聖教中の音楽資料

天野山金剛寺に所蔵される音楽に関わる資料六點（『諸打物譜』〔琵琶秘抄〕〔笙楽譜・金剛寺楽次第〕〔打毬楽〕〔篳篥譜〕〔楽譜断簡〕）の紹介・検討を行った。

『諸打物譜』は、金剛寺第十三代学頭禅恵（1284—1364）によって編まれたものである。ここには、禅恵と住吉社との関わりから彼のもとにもたらされたと思われる、これまで知られていなかった住吉社での音楽伝承をうかがわせる楽譜類が記されている。また、真源真作と推される『順次往生講式』の草稿的本文も見られ、本書は日本音楽史上重要な価値を有するといえる。

〔琵琶秘抄〕は、室町時代後期から江戸初期に成立したものである。ここには、本朝への琵琶伝来を語る詳細な説話が記されている。この説話は、琵琶道の歴史を説話を中心にして語る『文机談』に類話の見られるものであるが、両者を検討することにより、〔琵琶秘抄〕の琵琶伝來說話は、史実に基づく「国史」を権威ある土台としながら、そこに師から弟子へと伝えられる「口伝」の世界を重ね合わせた、複雑な構造の説話であることが明らかになった。この説話は、琵琶道継承の際に伝えられる「口伝」の世界がいかなるもの

か、その一端をうかがわせる興味深いものである。

〔笙楽譜・金剛寺楽次第〕は、金剛寺第五十四代学頭の真景房海琳（1680—1745）が、元禄十二年に書写したものである。本資料は、当時金剛寺で行われていた音楽を伴う法会の次第と、それに用いる楽曲の楽譜とからなっており、金剛寺で法会が行われる際の実用に備えたものであったといえる。あわせて、金剛寺には、高度な合奏が可能なほどの技量をもった「楽衆」とも呼ばれる寺僧が存在したことを指摘した。学頭によって本資料が書写されたことは、金剛寺において音楽がいかに重視されていたかを示している。

残る『打毬楽』〔箏篋譜〕〔楽譜断簡〕はそれぞれ楽譜である。『打毬楽』は法会でも用いられる楽曲「打毬楽」の笙の楽譜で、江戸期のものである。〔箏篋譜〕は、室町末期から江戸初期頃の写と思われるが、現行の楽譜と同じく楽曲の旋律やリズムを口で唱える唱歌を仮名で記した「仮名譜（唱歌譜）」である。江戸期以前の箏篋の楽譜には「丁・上・一・四・六・九・工・五」などの箏篋の孔名を用いて記される「指孔譜（本譜）」が多いことからすれば、本楽譜は、早い時期の仮名譜として貴重なものといえる。

〔楽譜断簡〕は鎌倉期の写と思われる。曲名が記されるのみで、いずれの楽器の楽譜であるかは不明である。

以上の音楽資料は、いずれも日本音楽史ないしは日本文化史上重要な価値をもつ貴重なものといえる。

（5）『全經大意』

本書は中国思想の基本文献13種の目録であり、概説書である。他に伝存がなく、金剛寺蔵の本書が唯一の伝本である。写本一冊。「永仁四年卯月十四日書写了」の奥書がある。永仁四年は1296年。本書が取り上げる経書は以下の十三経である。

周易、尚書、毛詩、周礼、儀礼、礼記、春秋左氏伝、春秋公羊伝、春秋穀梁伝、論語、孝経、老子、莊子

この書目と配列順序は『經典釈文』に最も近い。これらの経書について、それぞれ、以下の事項について記載する。書名と巻数、篇数。その注の書名、巻数、作者。次いで先行の文献からの抄出引用による説明。このような内容を持つ。各経書の注疏としてあげられているものを、日本の図書目録として『日本国見在書目録』、中国のそれとして『旧唐書』の経籍志を取り上げ、これらに記載された注疏と比較してみると、本書にあげられたものは唐代までのものに限られる、『經典釈文』が重視されている、「五経正義」が用いられているなどの特徴が指摘できる。各経書の説明に引用された文献の中には貴重なものが含

まれている。『五経要集』『編年故事』『高才伝』は書名も他には見出し得ない。『集類』は書名のみは正史の芸文志に見えるが、本書にはその本文の引用がある。『春秋公羊伝解微』は書名は『日本国見在書目録』『台記』に見えるが、本書に引用された本文の検討から、これは『春秋公羊伝解詁』であることが明らかになる。『孝経述義』は正史の経籍志に書名は記載されているが、中国では失われ、日本にのみ、その一部が残存している書である。本書の『孝経』の説明部分は大半がこの書からの引用である。『老子述義』は新旧『唐書』の経籍志（芸文志）に書名の記載はあるが、中国にも日本にも伝存しない。ただし、日本のいくつかの文献には引用がある。このような書であるが、本書にはその引用がある。

上記のような引用文献の検討から、本書は日本で編纂された書であると考えられる。『老子』の項に『集注文選』からの引用があるが、その内容に中国の文献には見出し得ず、日本の『蒙求和歌』の記述と極めて類似したものがあつた。このことから、上記の結論に至った。全文の翻刻を付した。

（6）『百願修持観』

『百願修持観』は、和製の漢文体で記された院政期頃の願文集である。本書には、願主による百十五の誓願が、以下のような構成で記されている。

第一依般若修十法 願仏智利法界生（般若経・六根清浄・十）

第二依最勝発十心 願仏智利法界生（最勝王経・十種菩提心因・十）

第三如浄名経説 修十七行生浄土（維摩詰所説経・十七）

第四依花嚴所説 発十種願願仏智（普賢十願・十）

第五持十善道戒 十号仏身願身者（十善道戒・十）

第六念慈十界生苦（十界・十）

第七如双観経説 発諸願仏身願身（無量寿経・四十八願・四十八）

普賢菩薩の十願や阿弥陀如来（法蔵菩薩）の四十八願など、著名な誓願を模倣した願が多く含まれ、菩薩達に倣って発願した願主の決意が窺われる。その思想的特徴は、特に、第六（天台・十界説）と第七（四十八願）に現れている。すなわち、『摩訶止観』『往生要集』『無量寿経』などを踏まえた記述を基盤としながらも、称名念仏などの他力による救済ではなく、自らの菩薩行によって仏身・仏智を得て衆生を救うと誓う点である。比叡山の浄土教は、法然の時代には観想念仏から称名念仏、他力往生へと思想の転換が見られるが、本書はその転換以前の作品と考えられる。阿弥陀如来のほかに、観世音菩薩や普賢菩薩などに倣って衆生救済を誓う点も、その時期

に活躍した千観『十願発心記』や源信『往生要集』の菩薩観に共通する。この願文集には広く読まれた形跡は無いが、千観らと同じような大乘菩薩の行願に対する真剣な思いを見ることができる。

(7) 『清水寺縁起』

「金剛寺蔵『清水寺縁起』(漢文縁起)について」(研究成果中間報告書)、「金剛寺蔵『清水寺縁起』(漢文縁起)考察・補遺と本文の紹介」(研究成果報告書)で、金剛寺所蔵の二種の『清水寺縁起』に関する考察と漢文縁起の本文紹介を行った。

前者においては、従来の研究によって、その存在は知られたものの、資料調査と本文研究の進展が見られなかった漢文縁起について、保存状況の確認と復元を試みた上で、主に以下のような点について明らかにした。まず、金剛寺本漢文縁起は、続群書類従本『清水寺縁起』と同系統の本文を有するが、金剛寺本は続群書類従本の欠脱を補える箇所を多数有するなど、概して善本と見なすことができる。内容の大きな異同として、金剛寺本末尾は、続群書類従本末尾までをすべて書写しているわけではなく、欠けている本文の代わりに続群書類従本にはない「清水寺別当次第」が書写されている。金剛寺本には、いくつかの書き入れが確認され、また金剛寺本紙背聖教は華嚴経等に関するもので、紙背の談義そのものも重要なものと見なされる。第一世の延鎮に始まる清水寺別当の次第を記した資料は希少であるため、その内容について更に分析する必要がある。また仮名縁起を調査対象に加えて両者の関係を踏まえて新たに位置づける必要がある。

後者においては、漢文縁起本文を続群書類従本『清水寺縁起』との校異を示しつつ紹介した。考察の要点として、漢文縁起の敬語表現の特色や清水寺別当次第が書写されることから、本資料が清水寺周辺で書写された蓋然性が高いこと、清水寺別当次第に記される僧侶は、鎌倉時代初期から中期にかけて活躍した者を下限とするから、本資料の書写時期もその時点を大きく下るものではないことを指摘した。また漢文縁起と仮名縁起の紙背とが同一のものであり、両縁起を一連の書写活動の所産として位置づける必要があることを指摘した。

(8) 『明句肝要』

『明句肝要』は、願文や表白などから対句を中心として名句を抄出し、標目ごとに類聚した書である。

引用句は、対句を平行に並べる形で配置されている。対句の上には半円状の括弧が付されており、対句に含まれない部分は、対句の間に置かれて示されている。こうした構成は、

書写者の関心や本書の目的が、対句を中心とする引用句の構造を明らかにして示すことにあったことを物語っている。このような対句構造を意識した引用からなる唱導資料としては、叡山文庫本『類句抄』が類似例として挙げられる。また、対句を基本的な引用の単位とする唱導資料に真福寺蔵『肝心集』があるが、『明句肝要』と共通する引用を含んでいる点で注目される。

標目の内容は、A「生死無常、病氣・地獄の苦しみを説いた句」・B「父母の供養をはじめとする願趣に即した句」・C「法会の参加者の幸せを祈願、また法会の場を讃える句」の三つの群に大別される。このうちAの分量は全体のおよそ半分を占めており、本書において中心的な内容であると言える。この中で重要な典拠となっているのが、源信『往生要集』である。『明句肝要』は、無常や地獄苦について他の唱導資料と比較してもかなり大きく筆を割いているが、対句表現とは別に、本文をそのまま引用するなど、『往生要集』に大きく拠っている。『明句肝要』の存在は、『往生要集』享受史を考える上でも一つの資料となるであろう。

本書の成立時期については、現在のところ明らかにできていないが、文中に大江匡房『江都督納言願文集』の引用が見られることから、それ以降の成立であることは確実である。また、末尾に見える『三指教帰』巻上の抄出について、『明句肝要』本文とは本来別に書写されたものであることが明らかとなり、平安鈔本にちかい本文と訓注を有する『三指教帰』を参考して書かれたものということが知られたことは、本書の成立時期に示唆を与えるものである。

(9) 『無名仏教摘句抄』

『無名仏教摘句抄』について、影印を掲げ、その翻刻及び解題を付した。

後表紙『無名仏教摘句抄』見返しに宝治元年(1247)の書写であることを伝える書写奥書、表紙右下には「源円」なる手沢者の名前が記されている。内容は、仏教詩文制作のための例文集として経文、願文、表白、仏教関係の伝、詩、序、讃、消息などの要句を抜萃して類聚したものである。そのほとんどについては出典が明らかではない。注記が添えられているものも多いが、多くは「氏寺」「山寺」「荒廢」「懺悔」といった、検索する際に便利なインデックスと見るべきものである。

出典名が示されているものはまれではあるが、本書には注目される摘句が少なくない。すでに先行研究によって指摘されている、慶滋保胤、同為政らの勸学会における作と目される経句題詩、性空上人を慕う僧俗による詩、橋在列「延曆寺東塔法華堂壁画贊」の抄録のほか、翻刻に際して注意した箇所を以下に挙

げる。

讚仏部には「白毫相」など仏の三十二相を言う摘句が連続する。仏伝文学との関わりを考えるべきであろう。

寺塔部は、「顕福寺修造知識」、「中堂供養儀式」、「熊野新宮」、「観修寺願文」、「雲林院塔供養願文」、「叡山講堂修理牒近江国之状」、「法勝寺金堂」、「天王寺法会」、「東北院」、「平等院」、「木幡供養儀式」、「金峯山」等、比較的出典を示した注記が多く見られ、編者の採集範囲の広さを示している。

法門部には、「法華経」二十八品の品題を注記するものが多く含まれる。先述した勸学会での作と考えられる詩句もここに納められ、平安時代から鎌倉時代にかけての法華経信仰について豊かな資料を提供するものであろう。

菩薩部は、観音や普賢に関わる文章からの摘句が主と見られる。ここでも「長谷寺観音」や「高雄寺十講口宣之文」という注記が見え、寺塔部同様、編者が当時実際に用いられていた文章に触れる機会を持ち、本書にそれらを取り入れようとしていたことをうかがうことが出来る。

今回の報告ではこれらの問題の存在を指摘することに止まったが、今後の本格的研究の端緒としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計30件)

- ①後藤昭雄 「全経大意と藤原頼長の学問」
『成城国文学論集』33) 2010年
124-147頁

[学会発表] (計8件)

- ①米田真理子 金剛寺調査と『徒然草』研究からの問題提起 中世文学会 2010年
5月29日 法政大学
②赤尾栄慶 養鷗徹定と古写経 口訣学会
第39回全国学会 2009年2月18日
韓国技術教育大学校
③後藤昭雄 『全経大意』について 和漢比較文学会平成20年度大会 2008年9
月29日 東北大学

[図書] (計3件)

- ①後藤昭雄編『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—研究成果報告書 (平成22年度)』成城大学
2011年 239頁
②後藤昭雄編『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—研究成果中間報告書 (平成21年度)』成城

大学 2010年 93頁

- ③後藤昭雄編『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—研究成果中間報告書 (平成20年度)』成城大学
2009年 236頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 昭雄 (GOTO AKIO)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：80022284

(2) 研究分担者

荒木 浩 (ARAKI HIROSI)
国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：60193075
(平成19～21年度は研究分担者、
平成22年度は連携研究者)

米田 真理子 (YONEDA MARIKO)
神戸学院大学・法学部・准教授
研究者番号：00423210

(平成22年度のみ)

以下は平成19年度のみ研究分担者、20年度以降は連携研究者

梶浦 晋 (KAJIURA SUSUMU)
京都大学・人文科学研究所・助手
研究者番号：80293950

落合 俊典 (OTIAI TOSINORI)
国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・教授

研究者番号：10123431

赤尾 栄慶 (AKAO EIKEI)
京都国立博物館・学芸部・席研究員
研究者番号：20175764

金水 敏 (KINSUI SATOSI)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：70153260

近本 謙介 (TIKAMOTO KENSUKE)
筑波大学・人文社会科学部研究科・准教授
研究者番号：90278870

宇都宮 啓吾 (UTUNOMIYA KEIGO)

大阪大谷大学・文学部・教授
研究者番号：40257902

海野 圭介 (UNNO KEISUKE)
国文学研究資料館・研究部・准教授
研究者番号：80346155

仁木 夏実 (NIKI NATUMI)
明石工業高等専門学校・一般科目・講師
研究者番号：40367925